



門 2
號 5624
卷

歌
巻
冊

本居宣長の書玉ありれをそへ何き門らをちく

○何の類の下にやとーをおくも

をれや人又れやの人あらぶがのみ強しくん

○まー

中ハ又ハきんといふと大く同一ききをいつふかしき
後そましといふきをらんといひ得る事何うたとハ喜そるの
を誰ときすまといふまきをあらんといふねおありまハ未をか
祢ていふ何らんを今うといふ何あるを見ますとさらねを

○くまく

近き世の人の好まうとあらぶ玉ありる此東すつてよくまるも志ら



○玉ありる編

101

あゝめんといふ。人は書きたるゝめふうける言ふ。まねひの言と
はあゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。
あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。あゝめんといふ。

○松の巻某

松の巻といひて又名をいふ。古くは松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。
松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。松の巻といふ。

今集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。
乃集の序あるは子日抄。大井川り香の序を介載す。乃集。

○人の名をさしていふ

人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。
人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。人の名をさしていふ。

明徳消息の事書くことなり。かまふも。法をくわおある
人々。かみよきこととせしむるも。其の事。氏をかく
魚。されど。民のこにて。まじり。けむ。名をかく。外なり。
漢より。何れと。附て。他より。あされ。をて。なり。あ。ハ
き。も。な。け。ハ。名。を。か。ん。り。外。なり。昔。も。法。を。く。わ
なり。人々。かみよき。を。か。ん。り。あ。と。き。も。ハ。何。れ。ぬ。なり。
古今集の事。朝なけよ。き。み。た。の。事。ハ。名。を。か。ん。り。
た。れ。り。も。何。れ。と。是。ハ。何。れ。よ。み。入。り。も。い。なり。た
人。と。ち。か。き。ん。よ。必。名。を。か。ん。り。あ。は。り。の。姓。ハ。あ
人。も。も。い。ぬ。き。た。ぬ。なり。そ。は。ち。た。り。き。か。り。乃

と。と。起。る。ハ。何。れ。す。と。た。の。と。知。つ。お。や。ハ。あ。み。と
より。何。れ。り。ち。なり。き。を。を。を。す。と。今。の。苗。字。なり。お。か。を
雅。文。の。用。方。と。い。ふ。や。か。る。何。れ。も。や。源。氏。物。候。入。り。の
如。君。の。事。と。い。ふ。り。と。名。を。書。り。と。あ。れ。何。れ。の。法。と。い
な。と。き。を。今。ハ。法。と。い。ふ。と。か。り。ハ。古。き。よ。い。なり

○おなきみ

大きみとハ。天皇より。親王。諸王。より。留。り。き。事。ハ。誰。も
あ。れ。り。今。江戸。より。大。忍。ハ。い。く。お。なり。と。い。ふ。き。た。り
も。お。く。親。王。諸。王。の。よ。り。あ。を。給。ふ。を。い。く。お。り。お。り。て。か
かん。よ。り。何。れ。り。書。き。事。と。い。ふ。き。た。大。忍。一。人。の。限。り。り。り。り。ハ

んや。かゝるあふ田舎人の心おろき

○あらま

まねひの雲をば葉のなみちとせんまうも。けつうはふれたゆりし

○まね

此論もかゝるまなり。さや〜ゆきをさ〜まんとかんも。入すん
を入ゆよとかんも。毎〜きえきう

○せうさま文の句

い〜もあひ〜ふの〜ハ。俗文の跡のなまもあふ。俗なりとあふ
ふれよ。い〜りく〜よ。い〜も〜く〜よ。あ〜けきハ。の〜あ
用ひてき〜ひあ〜

○か〜けか〜まか〜。あ〜りあ〜俗なり雅きよハそれら
き〜と〜ら〜。あ〜た〜人〜ち〜あ〜う〜ひ〜ハあ〜か〜
やん〜と〜れ〜き〜ん〜。う〜物〜福〜を〜う〜あ〜ハ〜と〜や〜ひ〜あ〜く〜ま〜よ〜れ〜と
の〜い〜ま〜な〜を〜け〜ら〜ん。あ〜か〜ま〜く〜と〜あ〜く〜ま〜く〜な〜り。た〜ハ
ま〜か〜れ〜や〜ん〜ら〜。か〜け〜か〜ま〜ま〜ま〜ま〜。あ〜ほ〜ゆ〜ら〜ハ〜ま〜。か〜り
〜〜〜あ〜ら〜〜。あ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜。け〜あ〜た〜な〜あ〜け〜ら〜。い〜の〜あ〜ほ〜ら〜ん

優婆塞空體

玉霰附論

ほふと初まねひの人なごのふあまハ物あさすかほうれと。又一
かまなつとてちやすねくしも見ゆきハ今こころあまは條とあけ
ほろひて。うさくれまごのんるさん人のおとひをささるはあを
するなり。まごま望控ぬのいさねハ。皆そあさるりさるれハ
そはあまゆもあけき。さん人あまをさるてまねすを考へ
ハ。あの本居のぬハ。古の字まいさくはく。うりさる。たごひの
事も。人のたごひをぬす。或考ゆもまごれと。たごひの
を。あさるりさるて推考さるとまごをさる。あまなごのた
ごまねすハ。すさんのま今今のけらめねハ。ふさくも思

さういふこともたゞしけれぬ

寛政四年九月

浅茅の里人志んす

端上あつせる詞

あをも文をもいふ人のをさる

かくやう小吉人のをばあふり古まよふもあふりあふりかて。ま
とわりかこひるこれをせとまよかくひては詞のすかこゆ
み。あふりかてつれなくまよ。文のくあふりなる人か。かるあ
ふりを用て。詞をいふまう。すこをこのゆこなる。かひな
らん。文よもあふりのゆかあなる

みかふもふもなひておすかひ

はおすかひ。おすかひふりか。又さねくてもいりやうにも

いひかふま。かくもあふりかて。文のすかここのゆか。古

人の文よ。なふりもまよも同まよ。あふりか。多く助辞をそ

ふ。て小をま。あふりか。あふり文の姿をとくの人んとそ

なり

いさうは

詞俗よまよ

そは皆なふりてまよまよ縁う

とそ。とそなふりひて。詞をのこいていまぬり古の文よま

くまのしづかうとあひ。とぞおちゆるとひさしひさし。はかばか
おてちねのうらみとひななうて。人のこころをひらきやうなり
されと久方おちよるの上さく

かく松詞を句の中をさみて用ふるなり。古文の格よおきなり
松詞とかあるは句の格よたくり古の例なりされちこそ公望
日本紀私記にも。おとを器徳とはひひされ。おとちちにあきとく。上城
いひすゑて。さく久方のいひ出はしきなり。されとけしめち
一向とねーかへ。のつ下しきふしつくる。経勢まき。松詞の上
小詞をさる。おとねるなり。さく此文を。松詞なを流しひて。
細をかきうたる。文もあへぬを。あへぬ松詞をいへん。あは

のすうさやうれそん

くおたうまんは何事もあはうしこまなるゆゑあることねく
けしんさく

おち何事もあはゆるゆゑきことう。又あれしこむねるゆゑき
とらひえし。何事もあはうしこむひてち。詞をひてそのあ
す。古人のえなかる詞のつひさるひな。ひあれといふ詞をいそね
といふ詞の格よて。句の格よあをいひ出さし時の詞なり。詞の終ま
まともよまて意の切きたるおは用ふるなり。よらういひつゝしき
詞をあしは。○は外おもひしきや。おちうねと。あちちふひし
ふらひをいひらう。一毎のすうし。きほひぬく^{ちか}てけしめし。上まの

うけの文とくくをち。そちからあつる。又上はうさうさ
ら。かくけいひのくさねるふち。ふたもしくくあやねをう
もつたきをむけよたぐさふて。あちひひあ
文字あやりの句

いよりのあまふあまふたまりたる句。必あいうえおのさあり
とくから。蚊田の清風もいさげふんのあひうぬるあう。され
中はあいうえおのあまふあまふは限るさなりと定めいつくさ
あ。あはねとつふものさ。かく理をうて推きはめていよまもの
おあす。あはあいうえおの詞のさひーが。文字あやりの句。あ
まーとのさ。たうさといひてあひー。さうゆえちあいうえお乃

久子の入るにも辱しうてあ人のさうあもあまあり。又けあま
なうて。さあをあまうたうふも。さううぬもあなる。心とふ二
をあけんよ

古今六帖

あうをを木の萩あまこき戸をて

さうさうかたれさうあう

後撰集

ほとまほ一歩あうなるのよ

あうのさかやあまこあうん

意園傳正のあま

わりの時てうき世のまはさむくも
くさくさけりさうとはさうま

又おね一人

わのう浪よおな—末をあらとどれぬ
若き回子けううえ—乃世や
ほあとも皆あいうえおの文字に入ると。又なやうなるは句平と
ちてはよかき

西行法師の

おまひたかく人のふよまきこむねて
あかふ社のかへりぬるふ程

風よなひく富士のまうけをよ清て
ゆきこ—ぬおねまひう耶—
いくすつきせよあ—ハヤにせをも捨て
あねうの世とや文—たもまん
此のまともいあいうえおの文字おとせと—あまうなる句平—
はともせも。いくすつきといつる句。あいうえおの文字入—せと
まら—まやうむて。あうてせをも捨てけう—まされ。又古今
集の目く—の鳴つるな^{カシ}は目くらぬぬといつるもあいうえおの
詞なくて。又まあうり年—ぬ—ひ—り—。まきをとの字
を次の句よ入て。とあともまの—りまて。昔四の句はう字あま

ことなるなりとひやち。あつちのねし。うゝ又さうこのおしくにて。こ
れもふちおのとひよもし。あまう此句なるハ。あいうえおの詞入る
まともあつちとのやうさうまうま句なり。古今集と後の集
さもの類不ハあつち。あまう魚をくけし。く撰る集なり。さう
を世之のいくととるしきや日ハくれぬと。あまやあつちの年たて
よけせハ撰る入しなり。あひてたのり説を助むとて。うゝもあま
むうをひやちも。人されうまこくすまき。又西行意圖まことと犯さ
てといふるあまはるや古よりさう法武の定め何とつひよとて
あまを。犯なくかめいもんりまうと。こいつはあま。平八の法
小たうひよを。此編の書ハ犯さといひたうひよと。それなるひ

ていふことゆきと。あまういもんは用なき詞もおけし。あつち
逆體の詩の声律の定めあつちなるんハ。さうもあまはる乃
事といひまらふ人の。かゝる詞をまひいつるもあまをさうす
てあつちえおの詞あつちてあまをあましなりとも詞の法け
つゝねくひひをさハ。年々つちてまらかゝし。又あつちえお乃詞
なくともよく詞をさうみていき。年々ぬもあつちし。こハ
あま上下のひひねし。あまはるなりされは編ハやうなるなり
なり。すてかゝるなりあまをよするハ。古のんをよくあまぬ集
ま。古の人のあまをさうんとするは。あまはるいうえおの詞あれと。文
字をあまはるし。あまはるはあまし。かゝるはといひて。んを用

むんずおあしきやね後学の信を志しけられし人といふその
をよくも言きましくあしぬすふたのめそののち

くましく山宮はも藤原をねく山まきくまき詞もなけと道
せえきしきま也

まの詞ともをろき詞なりすくもくまきくまきくまきくまき
なま詞なり

いやーけあ句とはくまきくまきくまきくまきくまきくまき
つらくねるを道せよあまきくまきくまきくまきくまき

新古今よりなるもめくたきくまきくまきくまきくまきくまき
詞なり

文部 市とひことありなると也

まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまき
まかひひてまきくまきくまきくまきくまきくまき

二ののののの

二つらとひてまきくまきくまきくまきくまきくまきくまき
年二年三年取と数入りやまきくまきくまきくまきくまき
のちまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまき
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまき
まきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまき

を船といふはさき一年を後より新なる烟なり。烟の巾の志
城おしへ西さんち。さきさぬ年の敷を。今よりことせうとせいで
いひてもさういれをぬなり。おまの烟の核をいせんは。寛政と
りよりの二つはあつと。いひきなり。さうも志むつ
か。いひきすにもあつた。年号をいひて。年の敷をうけて。
又の後をさす。ま。か。う。文。を。ま。ひ。ひ。て。す。ぬ。せ。ハ。お。や。よ
る。は。持。ま。な。さ。く。た。ん。河。を。い。ひ。て。あ。ん。き。な。り。又。日。本。紀
の。ふ。た。洲。を。ま。や。ふ。ひ。と。り。亮。な。も。ま。み。な。れ。た。そ。も。い。は
ら。ひ。て。二。つ。お。し。の。と。い。へ。ん。も。あ。つ。て。い。へ。ん。と。さ
か。う。文。を。ま。ひ。ひ。て。い。ひ。き。す。に。あ。つ。た。年。号。を。い。ひ。て。年。の。敷。を。う。け。て。

ふ。と。い。ふ。お。や。の。ま。な。さ。く。た。ん。河。を。い。ひ。て。あ。ん。き。な。り。又。日。本。紀
の。ふ。た。洲。を。ま。や。ふ。ひ。と。り。亮。な。も。ま。み。な。れ。た。そ。も。い。は
ら。ひ。て。二。つ。お。し。の。と。い。へ。ん。も。あ。つ。て。い。へ。ん。と。さ
か。う。文。を。ま。ひ。ひ。て。い。ひ。き。す。に。あ。つ。た。年。号。を。い。ひ。て。年。の。敷。を。う。け。て。
あ。つ。た。年。号。を。い。ひ。て。年。の。敷。を。う。け。て。年。の。敷。を。う。け。て。年。の。敷。を。う。け。て。
なり。た。ら。れ。た。中。に。よ。う。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。
き。な。り。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。
の。後。は。の。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。
河。を。い。ひ。て。あ。ん。き。な。り。又。日。本。紀。の。ふ。た。洲。を。ま。や。ふ。ひ。と。り。亮。な。も。ま。み。な。れ。た。そ。も。い。は
ら。ひ。て。二。つ。お。し。の。と。い。へ。ん。も。あ。つ。て。い。へ。ん。と。さ
か。う。文。を。ま。ひ。ひ。て。い。ひ。き。す。に。あ。つ。た。年。号。を。い。ひ。て。年。の。敷。を。う。け。て。
と。を。用。い。て。少。く。あ。つ。て。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。
お。く。は。い。く。ん。を。用。い。て。少。く。あ。つ。て。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。
す。の。時。を。物。な。つ。て。い。ひ。き。す。に。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。あ。つ。た。と。

とあがられ—なり。いかに—ちよ。あつひかかたうし
魚—その紀をさうりうへんをあらわすま
のむき。いかに—もよ。あきり—はゆな—て。ひ
いかに—いかに—いかに—。あつひかかたうし
もた—あつひかたうし。か。あつひかたうし
あつひかたうし

いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—

いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—

いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—
いかに—いかに—いかに—

徑を之に用ひざるハ。亦た其のたをへく。亦た唐なをのり
去を往の義とし。教を使令の字はしくはく。去をさして教と
ひ。自稱して僕とし。あるハ。肅教違却當頭遮莫なす。ハ。其
の徑あるハ。亦た其の後の徑なり。亦た其の後の詩の多くは。徑を
用ひされざる。其のたをさ。其のたなりし。又用ざるなり。其用
ひざるゆゑは。俗徑なれり。別は雅な。其のた。其のた。其のた
あり。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
い。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
徑をとりて。又用ひし。又毛詩に叔兮伯兮。其のた。其のた
と。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた

徑の類なり。是と古ハ文は。其のた。其のた。其のた。其のた
ま。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
な。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
心。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
ま。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
も。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
の。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
ぬ。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
物。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた。其のた
なりて

此編をよみし。されとおの注はよから。何を思へて理の明らなるん
るをむひとすれも。志をうく漢文の例にならひて。よりて何と
おといはんもあし。いふ。いふも上つ代をいふ。なるの教
の比より。いふふも。かく文章のすうさより。いふ。いふ。いふ。いふ。
かへし。いふも。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
用て。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
あし。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

時代のありのさういふ今の人の文を時代のさういふ人かへして中若
のよりける文をさういふ人の何をもさういふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
乃ちさういふ文をむけおらうき世の何をもさういふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

ぬえよ似たりといひてむう。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
の類

此編を。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
の文を。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
あし。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
の類。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
まし。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
ては。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
言。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

のすゝかたをいへていへておぼえぬことなり。古の文と今の
文と。勢をよくしつゝ。後の世の詞も。古の文と交ふこと。さ
らに。さうして。みへる。古の詞と後の詞をすく用ふる
付らば。味つまたらんやうにも見ゆべし。されど。よみかた
らん。さ。さ。け。あ。と。人。ま。え。す。ま。ま。の。よ。め。は。又。古。の。詞。の。こ。と
何。れ。と。い。ふ。も。古。の。す。ゝ。と。勢。を。う。つ。ま。す。は。い。う。て。古。の。う。ら
ま。と。足。ゆ。き。や。あ。の。姿。と。い。き。ほ。ひ。を。あ。ら。わ。う。と。い。ふ。業。ま。え。
ま。を。う。ら。ま。の。う。ら。ま。か。ん。を。か。く。も。か。か。ら。な。り。ま。ま。古
の。詞。の。は。な。り。か。ら。い。あ。ら。ん。と。い。ふ。人。の。業。ま。も。な。り。は
は。く。と。い。ふ。何。の。こ。と。か。ら。あ。ら。ん。されど。古。の。う。ら。ま。と。姿

い。ま。ひ。を。う。ら。ま。に。あ。り。て。詞。の。う。ら。ま。す。う。ら。ま。は。な。り。む。し
こ。と。あ。ら。ん。あ。ら。ん。あ。の。文。の。う。ら。ま。の。こ。と。な。り。後。の。う。ら。ま。の。古。の。う。ら
の。文。は。な。り。も。あ。ら。ん。と。い。ふ。は。な。り。古。の。姿。と。勢。を。う。ら
て。う。ら。ま。を。う。ら。ま。む。し。め。り。な。り。後。の。世。の。詞。の。古。の。う。ら。ま。よ。入
る。ま。を。う。ら。ま。り。又。古。の。詞。の。好。の。世。は。な。り。ま。ま。と。い。ふ。ま。ま。を。う。ら。ま。ん。又。後。の
世。の。詞。の。う。ら。ま。を。う。ら。ま。り。ま。ま。よ。入。り。ま。ま。と。い。ふ。又。古。の。詞。の。か。た。り。は
後。の。世。の。姿。の。ま。ま。よ。入。り。ま。ま。と。い。ふ。この。味。を。う。ら。ま。ま。と。い。ふ。の。ら。古
の。詞。と。後。の。詞。を。う。ら。ま。り。て。古。の。う。ら。ま。を。も。ま。ま。と。い。ふ。又。古。の。詞。と。後。の
詞。を。う。ら。ま。り。て。後。の。世。の。す。ゝ。と。い。ふ。ま。ま。も。か。く。と。い。ふ。ま。ま。と。い。ふ。か。ら
と。一。篇。の。書。は。な。り。あ。ら。ん。と。い。ふ。て。詞。の。う。ら。ま。に。ま。ま。と。い。ふ。か。ら

人のいふことなりは文法なるも。典謨訓誥諸子百家古今の流
を兼て。まことに一篇のすうこのすうのすうを。古の文のいき
ほひなすう一切のすうなり。おき後世まで。古の文を法く
ふハ。かゝるもあつたらん。さうおのすうなり。たその
古の形とかなをまるとハ。巧み詞をとのすう。法を法く詞
をつゝとあるすうなり。まことに家法の文よハ。まことに乃
不ハあつた。なにかたつた。さうは文よとつた。き詞は
く。古と今とすけるなすう。れきハ。古の文を法くす。税
相宣命かゝる詞のすう。いふと思ひて。あつた。さうすう
くとも。今の世にすうをさる詞のすう。廣くいふと。きよの

おあつた。さうする所を。かゝるの篇を古の文をハ書え
しめられる。後のすう。古の文を法くす。ハ。此の
より始りけるなり。此の文のすう。さうする方より
ま。人のいふこと。此のすうもあつた。今より後のすう
も。古の文のすう。古の文もさうして。たすう。此のすう
た。此の文のすう。思ひおわす。たすう。誤るるすう。
文のすう。さうもあつた。ぬつた。人の口より。みすう。さう
なすうにあり。此の文を何れと論する人多かれ。さ
人も。此のすう。誰もの世も。法くす。たすう。
なすう。たすう。さうすう。たすう。

箱の文をみくらにまねをかく。なましくおるをくしてを婆小
なり。かのうらち精なひさんくはなすなりもきんし
みい本居のまね古よりれ文なりとてあつをえし。古の詞
をなまめするやうれいと。古の文は婆といまやひをよく
らひまゆりきり記す人されも詞をけいまやひゆらて。古乃
より好す。はぬし古の字よりく。その況きあるをのれとハ
後の人のたよりとなまきりたほし。たふると文のすかを
才のみかきあなり。さを好そ。それを教へ備し。いと。と
あつていれおもき皆ひつらなり。初学の人の古の文をよみん
と思そ。かゝる人の備なるまて。あつ古のすうこと勢をよ

く考へる人きなり。あつらふと起るときハ古よりれ文ハまね人の
らん。もと古よりれもなす。後のすうとれ文もねをむまをう
あつかきうれへし。さうとつらつるれもなす。人の文はす
あしを思ひまゆりも。あつらふこと勢とをきて定むしきなり。
さる古の文をよみて。其勢格調を考へん。ハ古の文のけ
ちめをよくあつし。今おわらるをいふ古事記様調をよ
延き昔天曆よりうらと。源氏枕草紙なりとてれ文ハ。その婆ハと
ましうらとあつらふと。勢格調をよみなり。後拾遺をよ
席をけいえて。まねよりくおとの文をゆらるるゆらぬとあれ
也。勢格調たうとを皆まゆりし。はなすちをまねる人。そ

後でなければ。近きその人の著る文。新勢のよきはひさるを
いふもくまれなりた。あますすれさるハ新勢の翁一人のこ
とに之し。こハ新師の身を所なかりさるくひひなきんと
てしやうにも。人あふへされと。さるがま泥るまハあは公
の論なり。またさあらん人さるて初んきさるなり。されを初
その人ハ翁の文をハみりて。古の文ハ新勢をさるくうつさる
事をおらふし。ハ新勢をはさるもあて。あま古ふりの
文なり。こハ中昔の文なり。おらふさるハ翁の時代をのこして
いさる。詞を體勢よりて。古くもおら。いさるし。くも見ゆる
よのねをさるハあまぬし。いさるし。けさ。あま文のさるに

あまもま。か。ねむきのあま。おら。さ。は。い。ん。も。さ。る。て。
あ。ま。の。あ。ま。さ。る。ま。は。今。あ。ま。さ。る。し。し。し。

此ニ書小し。ことハ本意のぬし。ハ古のさる。あ。ま。の。さ。る。
人なれとあま。う。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。
免。う。け。さ。る。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。
お。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。
之。ハ。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。
又。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。
下。に。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。あ。ま。の。さ。る。ま。は。い。ま。さ。る。さ。る。な。り。

くもあすれん

寛政四年の〜神無月

寛田村の〜

辨玉無教二論

○何れ教の下にやどをともく事

或人の論よといく事

辨云日本紀の教は陀黎耶始比登と有るや。いさよ
 や。〜きや。〜ふじの教のや。〜もそや。よれ通ふ辞
 にこはあも〜がひれや。な何〜
 まこたき〜れ人よふ事。いふ茶のあれ〜もたきや
 乃人中よふ〜いふ〜あ教事か〜

○ま〜 論よふ〜後を〜さふべき哉云々

辨云あまの玉のつれあづらうごは事ふるさかしくいへ
いんやや但しけきぢめとは條又下なる妻やまを
ひの條かどれもまのづうらぬうふはをや

○くさく

論云まあびれまどいちのどめおれくさ

辨云まかぶの窓といふは歌雜じたるはけ歌をま系
古今集かどの凡れ歌と思つるよわけくはれすう後を
凡れよまれたまは後をれ詞歌用ひくもたるちうすべ
歌も文もやの凡體の時代は應じて詞をもはくふの
ふる歌あびやちか玉あまは書ハ大が廿一代集れ

凡れあめつらき癖もつるさぐとゆる如く中若れ詞をも
う案捨ごふところちれまかぶ雜うあむ抑皇玉れ詞
はうひれ本を以ていふいんも物学か人の家り窓とあぶ
ま事ちれども中若とあつてま學びとあむもをま
はづごの名とちうたまはの學びとすふ窓なれま何事
うあむ源氏物語よ人のむすめれ事れ窓のちらふる
又とつかへや物語も窓のちられたりとけくし不ど
こやかどつらあまも親の家れ窓とないとををすべ
てはまあびれ窓かどる歌雜どれ既美あ葉もけれひと
まかれあつそは未に又中若以まの歌もなけいとも

雅ずべき事のまじり又まじりたる古くゆえんは
いふやや字はれまじりも言の糸の道糸道中若
く糸あふと常れなるか敷をまじりやなら例をい
ふ糸糸の道と遊ば農道などいひ源氏物語も及五のワ
ざ故本の道と云ふるをまじり序れはこやまじり
さしとやまじりも各別を以ていひつゝのたは論ど
かどいふべし古は文章をまじり事もちりつゝま
はちり

○おのれ某

論云々

辨云古の文は、おのれやどつゝも各べりも書たる例あり
にちれんらおのれ某と書しんらまじりりきりちり
やといふか敷たかまじりおのれどかりも各べりも
例ありとあつゝまじり二ツを以てまじりいふ例
なきれんらまじりて例ありこと、は書きいづる雅文を
まじり然例ありし事、はまじりいひつゝて書しりいひつゝ
我と書きおのれとて古は文よおのれと書まじり各とま
はりいひとまじりをは論者凡て古の文を考もせむらに
もあつゝまじりか敷を以ておのれつゝていひつゝて書しり
まじりいひつゝていひつゝていひつゝていひつゝていひつゝ
まじりいひつゝていひつゝていひつゝていひつゝていひつゝ

古今集の詞書などいふはさしは論なり又名氏のこと事
らふ物語源氏物語など古の語ふといふ多くありて
今こそいふあがていふもいふも

○人の名をさしつていふ事

論

辨云官位やうき人の名氏のこととていふもいふもいふも
と書ゆふかしと云ふいふ今人々何右邊の何左邊と云
称あれはあまをいひいふ事ありやうは称を俗なり
やう思ふをいひて俗をいふは稱延喜前後のこといふ物
みな何れもいふもいふもいふもいふも即こまにアサチ字と云ふも

ありとくをせし人のことなりと知りたる相馬水次郎 鎌倉

権五郎 鳥海孫三郎などいふはこれいふも知るべし 他いふは別
なり

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

多しありしよりして戦国以後に下れ人姓氏みだりにあり
 て今ハ歴々の家などいすし姓の極ありぬあり況平人
 などはたうとい姓を志さざれば多き姓を古學者か
 と義の事を志して古に志さむとして古めしき姓
 を撰で已ぐ好しれまうせてみだりにはきて名の
 をいとくわこころいしれ事ちうりこれ漢學者の苗字
 を切て一字にせぬハちうり一字も千の形あるは古
 學者の仍姓を一向にせもちうり事ちうりこころ
 にいせり云れまうりさく今云苗字を雅文に用るを
 いふとはゆるゆるちうりやハ姓の志れぬ人さうは仍姓

をさうて書べしもの事やいづり又すぢたしき家れど
 とりとれ起りささごうありともおのくともつあやハ
 ずさうしきとらり場とぬらちうりハ論かき云は
 ちうり抑苗字ハたし鄙俗も親先祖の名のちうり
 て極ふる事ちうり鄙ありとて嫌ふべき事やあは凡て苗
 字にうけぬ俗稱とて地名も器物の名にとも既り
 やれと定りたる名稱ハたし鄙俗も嫌ひかき義
 系乃歌もすら^ムガウノ^{サト}ハコヤノ^ヤ又饑鬼^{ガキ}
 且越^{ダム}ふどらみまう僧の名かたは皆漢流とて字
 音ちうり字音も古に雅文ハあはれまうり事や

ことども既にの名とありたる事を辨はざるはなりぬや思
 以今れ字者苗字又俗名ふどもを辨はかりて古に志
 々々苗字を稱すはるもまゝに右邊の何處に記を録す
 はるも古よりいひて記録に記すは假字りのにも
 多し事あり思ふに苗字を稱すは事を古にあり
 ややうやうは例の粗忽ありぬや 源氏物語に入道の
 姫君の御許よき 辨云こきいふかふさよと出るは
 んはかこい但し名を書かざるやあはれよき案て云うさ
 思はれはらあこれ名をてきふし又いふはこき
 を今にあらんと出るともは條の論よりいづら

ざらぬやられはとれはかふはとてまゝに

○大きみ

論云

辨云五穀よは事は何ぞもしたるはをたところ人け
 稱の本故ありはしと然るべきかどの人をさるゝみだ
 りん大君といふをさるゝもさるゝは故よきやに
 かつといふべき人を云ふはされき思ふに論を書れさ
 をさるゝまはしとありは

大将軍家の御事にとりて論じたるはいふやはは事
 かけあはしともかこられど論者の古に准へて書む

うは何とうもちりききとつれよきて、いさこ申さし御官
 職ハ古より祭あり官名はゆいばやうもつ御官職をわ
 きてもかおもる稱とあり奉りやうとては、いさこい
 らびりしを學ぶとふと歌文の詞あり祭物此名凡てはゆい
 代々農例拾遺より考へまきま祭をいふまありしゆい
 稱れたる條にはきぢをさしとゆいさしとてやうとゆい
 此論の時きこつてと古を學ぶと云ふはありば稱のよ
 けもかこつてはふさうへもゆいさしは例拾遺考へれも
 よいばやうゆいし雅俗をいふともふふふびれ道のうへ
 事はさぢあれすべく上以用ひゆい地ゆい下とてさしこ

りて私子ちぎつしををいさきりうはたを義理ハ事ゆた
 とも今れゆ定うそゆゆたをゆいさしあり
 ○むふがう

論云

辨云神代農歌むふがうやまをいさしゆいさしゆい
 て各法をたつしは非ゆ事ゆいさしゆいさしゆい
 ちもは彼ゆ准へて申下は詞ゆいさしゆいさしゆい
 ては論者書ゆいさしを得ゆゆ
 ○ゆいさし

論云

辨をまげせの人 あづことふハねかうれこととたふせに
んはねがう あづこと云名りきを釋してのしやのき
をりて釋く故よりねかうれがねかうれは論よりねかうれ
各部大人の況もあるねかうれ 抑上古のあづこと
事又ねの名譽とさふとは古事記傳の考へて辨せ
られかといはれおきのさして今ねかうれとあづこと
文のあづこと云ふハねかうれはねかうれはねかうれは
ねかうれと云ふハねかうれはねかうれはねかうれは
論よりねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
ねかうれはねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは

古物語どもに田舎の事云ふが多き、志はねかうれと云ふは伊勢
物語にもねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
源氏物語にもねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
又ある日記に父の常陸、女にちかして任玉に赴く時
むすねの事、城東のねかうれ人にもあつて、海とんむいみ
どりねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
志くみいふねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
いふに決してねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
ねかうれはねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは
むうこねかうれはねかうれはねかうれはねかうれはねかうれは

へー次にむうと今あて下れりやうの異城て都ありぬ
羽ハ或もあことあべーを云るもんごうあり今とて
都の弁ハ俗にもぬあといふは外かー何ぞいふ人の背ぎ
あぢことなひべきや又由羽を治め給ふ人の城下城ハ都
ちうと云るも漢流あり 皇玉よてハ今とてもそをハ都
と云ふがこー又今をれ古よ准へてあぢこといふべきもの
ハハ代官ハ掌り治るる所 處々あぢ城を治めハ代官又
役人のうへうと云ふはあぢことと云へきや也然れども
朝廷よをぢめ何して何事も 朝廷の名目ハ准へて
云かこいふも多し是はまが今れをてハあぢこといふべき

處ハちうと云ふとんかくに今をてれも田舎ハたぐおかの
や云れ何事う何し准へて何れいふや

○あぢ

論云

辨云まおびの窓言の葉乃道など中若う衆云る
例多けれハあてふこと何しむはあぢハとて漢流
訂めていとうふさくしやあぢハゆるんべきや何しん

○あぢ

論云

辨云まおびの窓言の葉乃道など中若う衆云る

となまき言とのをぢり何れをけりまはさばをい
には論ハ佛書よ、いふゆゑ通をかく別紙あつてごるは
なう古詞も、詔ミコトノコトをうゝまた申ウケはまをこしまた
かどをさすハ決ケツしやなうこの善別ふしにりあは
言よふはまをこふまをこら古字昔れみだりやう
○せうやう文の詞

論云

辨云いづれははらひごほの事ハ論者こそは辨ひか
し思へあまむあはれの言にもあふはかどらういふ
たふしやうれハ是れ非しけりまはだ かごとけか

の事ハは論まこといさぶ事ありやうれことな若と
今どのかうあつてをさしにまごひく若の例あな
書ごたすは形光あつ但し元を何々らまは
はまは言の用はやうれ雅俗はつきまへに別して
今をハ俗言にまふまごやう雅文よまこと成とご
らまはるあつ

○又乃或人能論

發端此詞

辨云論ハ本若のあつたごうにまをまごり
りてれし考ら事ハのまをよせまは論ハ吾翁の

意とは大ひよ遠くつむあつてはたゞ古く例よまひをたつ
をせ入るむうことども故さとりもたつたにこゆあれよとま
そを以ておしたる事、つづくにうあれ但しことまうを
りて考ふと書ふ、いさぎ詞の成得がはうこれ言とけのたま
ふこのことづひいさきも何しざれども人の事を評論をせ
にそつあといわれ語をたづねる中あつてまうを趣ぬら
うかだ試よいそと、毎がけすづをこぬれれき
もじつゆいのそつ入もくかど何しハ翁れ文のそつ以つよ
ちり又ま教を歌文のたつゆれれしあしまがくふとれ
事をえは書ふは何しづみづううの歌歌ゆもる文

れむぎにけいふまよ、あつたつ 辨云吾翁れ歌文
とあはれく人のうくまもはまをたつ難むしとあつと
難すべき事はなまきしもあつとあつとむげにけいふ
とつむあつてつとつた書がはちうかどなかくて已う如
忌れふのきたちれもあつたれしゆ歌をうかか大言を云
ふどの人あれまみづもれ文にいづれも優もたつとま
ちうるは論れ文をえられた凡て文の体をいこる人もあつ
にソぞれの中いあつたをりきていむばの詞の始りもれ
人のまもひをいそづもてはるちうやんはするか
いはいんや思ふにこま士代日記よ女もしつとんい

とるふくともあれを思ひて書きたるべしと彼に上り日記
とるふくわれもゆき坂指て日記をす事事あり。然るに
の文に上り指りの文もきりしとる何れに依りよるふに
條にあがつるひてとあれを論ふといふ用言もきりす
ゆきなふくし見ゆ論ひとし事事を体言のよるにの
論をゆきあつれべしと用言ふらきし時とだ

ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし

ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし

○款も文も古れをばる

論云々

辨云云あつて是れ發端の文をたづね書れを趣を
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし
ゆきなふくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし

○みづくしとるもの詞の用ひしゆきをきりし

論云々

辨云々を「」ふとふを添て「」ろき所あり
○いさくうげ

論云々

辨云若れ文をむむえげして云例のみだごせふ架
源氏物語いさくうげえりてゆくは云々

○そはうねをすうくもさとうねうとせ

論云々

辨云論者詞の中におくせと措ひよおくせとのせらえ
とあつせやはせう中れおくせう及あつ後撰集れ所れ

むむられれせの語ちく「」著「」茶葉れあをみ「」せ
ふどあるとせうて詞のとぢめれ、おくせちく「」無ととせ
おふゆるといふ「」いせ「」もなめぶとせ、を「」さ
論ふ架そ「」せの「」を「」せ「」の「」お「」お「」お「」お「」
詞の味をも「」せ「」せりの「」か「」こ「」い「」せ「」お「」お「」お「」お「」
一向に「」せ「」せ「」せ「」せ「」せ「」せ「」せ「」せ「」せ「」
人の「」い「」い「」い「」い「」い「」い「」い「」い「」い「」い「」
論ふ「」こ「」い「」源氏物語ふ「」れ「」思「」い「」で「」き「」こ「」け「」し「」と「」せ「」又「」き「」
お「」ほ「」く「」と「」せ「」茶「」葉「」れ「」う「」い「」ふ「」ら「」と「」せ「」ふ「」ど「」あ「」れ「」た「」ら「」
れ「」せ「」と「」お「」り「」て「」れ「」を「」な「」に「」思「」ひ「」ま「」う「」づ「」た「」ら「」よ「」わ「」ぬ「」ま「」

これあやなる「幽」は神の「風」はびく「世」も捨て
 ちよも皆少なる一くあくつらう一きて「秋」の秋系に
 河にすまき「おの」浪よこさき城「河」いう「た」入らるるもゆよ
 「か」如流よむと敷と粗忽とく「あ」ね「い」たの「り」に
 白れ頭れくゆあまふうくやな「い」は例よ「い」べ故
 調「い」ろきあ「い」翁れ定「い」ま「い」は「い」たの「り」
 白れ半ナカにあれゆふと本書をよく見とよ「い」べ
 ちよも大う「い」ひてさべ「い」まもあ「い」ね事ち
 まが古今集に「い」あ「い」れ白「い」る歌あやや二百十
 首「い」あること「い」まふ「い」は「い」たの「り」あり

は字かくてあまうたるも一首も「い」れ事か「い」もを
 て「い」後撰拾遺か「い」も「い」は格た「い」ふ
 か「い」何ぞ大う「い」まて「い」あれべき又「い」ら「い」れ鳴は
 ちよも「い」論「い」辨「い」思「い」山の「い」を四の「い」
 「い」は「い」を理「い」か「い」例の粗忽か「い」古今集の
 「い」ら「い」「い」ま「い」て「い」思「い」も「い」ら「い」ま
 と「い」ふ「い」は「い」ら「い」今「い」思「い」あ「い」ら「い」も皆
 と「い」ふ「い」ま「い」も論「い」れ「い」ら「い」上「い」
 句「い」は「い」ま「い」て「い」ま「い」て「い」ま「い」
 ハ「い」の「い」上「い」ら「い」二百八十首「い」れ「い」思「い」や

云上よれも長して四首まで例はたつたなりとあるは白
のしるすいそ右の三首ともいふれ同かくりのきと同格
ありとありと如次の句れ頭は属たるりのありとあると
りも句れ頭はとるるをいふや思ふと後を人の誤り
てをよ上ちる句へはかてよみかゝる言が癖にやしてや
れ耳ふれたる故あり 犯しては、いふかる書さぬがや
辨云、かゝるはありきびーさたる書さぬよ、あさぞあ
必然云、ま、き事ふもあゝばこ、まことん、あ、むの詩論
の書にありてのれもあゝべりれど、あ、ま、詩のくんれ云
をとりて歌のく、い、むもされと難す、き事、もあゝば

かゝるはありの詞の云さはまが成難ど、歌は調と云事見
も詩に、つ、よ、云、と、歌のく、も、古くもをさく、い、と、さ
事、ち、る、成、部、大、人、か、ど、も、歌、小、も、文、も、つ、ひ、れ、た、る
あ、ま、く、も、を、難、げ、く、ま、あ、さ、さ、さ、ど、る、か、れ、る、の、義、理、ど、ん
遠、く、は、な、り、の、と、ど、ん、い、き、事、よ、あ、い、れ、る、い、と、い、は、ん
よ、ふ、な、い、大、歌、詞、も、ま、し、拾、遺、集、も、歌、源、氏、地、信、ふ、も、い、も
あり、又、よ、五、百、著、歌、合、題、判、れ、た、の、歌、合、の、基、俊、判、れ、詞
を、引、て、云、く、ま、い、は、た、ら、歌、す、げ、は、い、め、と、い、は、ま、く、と、さ
は、い、ま、し、た、ま、や
は、い、ま、し、た、ま、の、詞、あり、て、云、く、あ、い、は、る、ゆ、ち、う、 辨、云

すく古を学ぶ道に今れ已が心をかりて定る事なれども
ふ多しわと心の日々志のうつるもこれ歌の海れ如く
と思ふ山のとてま理なく調つるも心づくるも
事れ如く心は已が私をよそ古に比例せし考す
物すき事なり古の例子違ひといはるるも
とより思ふもまことなるはなあれ故に心づ
といふ人の例はりて今れもつて心づきたる書あり
古人の歌はよじにこいれりあはれは
心を用ふしことのみさるる 辨云こいと思ふる神か
る古れ人も心づきたるは用ひざれども考すこと

は格をとりて事なきは自然の心なり 然れ後世の
人々をの古の自然の格は以て心とて歌事をゆげ
たると古に假字はるるは法式とあやちり
古人はは詞は假字を用ふといはれ假字は毒に
うまき考て心を用ひて物を書き事ハあやちり
も心づも假字は毒なるも自然の定りあれ
がゆゑあはれはあはれは今はりてあはれは定るも古
るは法式かけしは心づきたるも假字つら
最古にその法とて心づきたるも古に定るも
の例はなりて心づきたるも心づきたる

○さざむごとのうりに流し

論云

辨云ささむごとの流しやまといふを全く俗言にあらは
 りまも今もまも歌の詞まかしたるもささむごの俗
 言の書きのいまもわれまもていまもささむごとの
 むりともハ詞を雅言まもればやのはうぶまもはらもまも
 おとの俗言れまもはらまもいふ清ま文の前も
 べまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 とぬまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 む言とは俗言まもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

まもまも何事まもまもまもまもハ流士ニヤビコヲとまもまも人をも指て云
 まもハ流士ニヤビコヲのまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

○二つれまもまもまもまも

論云

辨云二つれのまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 粗き料簡まもまも書紀の訓も巻數をまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

凡て書れ卷の次第年号ふと成に形を玉のこと紙
るのを教よなあまやちあるべきたをハハ玉言れぬるを用
むるや本意をちる先も多る玉の事といひくとも
くてもゆゑむ古へ字ひもを用れ事なり御玉言のあ教
をよてかゞさ海は後よりふく二河れ年といハ漢文が
祭ちり二とせ三とせふと云ぞ神代よりれ皇玉言ちり
り教又歳とせとの事を通去りし年以後は祭かぞふ教
言といれど今より後をわけて云中はヨふく祝の教
れふとせふとのふもまて日本紀の教は豫呂豆余珥詞句
志茂織茂知余珥茂詞句志茂織云くは教ひあ祭りも

ことわれあり皆未をうけたる言れありん也

○某があるに云く

論云く

辨云おあし是れはがりしををられたるハ已がく人の
の神よをあげれば必かへき所と必れくまてき所よのあ教こ
とありしを味とを古人の書は物をか考てくつる初き
やうくありくの所と指く云教つる事れありんと羽云
まき故よ前より祭てうかを地こと多て思ひおれはり
おふくき詞ちりくと本去れいもれたるあり

○道ゆきいづ

論云々

辨云後世道ゆきざり見えたる事どもを記せし
まことやの書れ各依道ゆきざりとほ事ごとくむい
う何し事ごとくもの名をいふゆめてはくわねあ
むあしきれおされたるを書れ名的事よ非ははご
り人れとて道の記の事依道ゆきざりと云りのやと
いひて無えがむことやとあり論若いん見えそこちひれ
教よのほごろれ人のある物依見えとあるをいふ是部大人乃
はけらもわら書れ名のゆを指くまこといひてはよ
はごろれ人のある道の記無名つ巻たるありかごとく
まねたり

バこやとむい巻

○かいつけて

論云々

辨云は論玉のしきれゆことられ好むいむが事
ちりき
のあはつられ詞ありとよよなありねど何まう人
ごん好
て書るふふさたやうとてやあれ然るは論者い
さ此る依
もあひことごらやとすはううかする事をも云
えり

論列れが案てつまことむくつらてかいつけて
よき前あり
云、辨云は論さ教るやう無れがもらういひく
うき前
をかきと書ははらでふるうらむ物清ふれ々
書使の言多

くまゝ本語を正しく書たるも音仮に留めず事此多
きいも人の口にいひはくたるも紙に書くもまゝいふ
書たるもこれあればさういふ道ごとくも正しくも音仮と
つらつてあるものなほいふにやのむいふをいふも源氏物語
に「つらつら」ふく「つらつら」思ふまじきえとせ給を侍とそ
上のり。一本にくとあり。又「つらつら」を一本にふくち
だむド。まゝ「つらつら」をさうにひてはた。り
一本にいと「つらつら」本は「つらつら」一巻。こいふと見はけたる紙を
湖内抄あり。と「つらつら」紙こそいふは「つらつら」ま
に音仮を留めむもあつてまゝ「つらつら」ふく「つらつら」は亦も

本語を正しく書てよめ。このも京都大人の源氏物語
語釈釋惣考に本語を書て留へる紙片のふくち傍
に注するものあり。まゝいふは「つらつら」又「つらつら」考に「つらつら」
も後を音仮のまゝに書は本語と留へよめと「つらつら」紙を
まゝに「つらつら」といふは「つらつら」といふこと

○まゝこゆ

論云

辨云いまごまゝしく考得むまゝいふこといふか
しといふご考得ぬ事ありは海にありまゝい
にありまゝ考得ぬまゝいふこといふは海にありまゝい

たる初めそのつとまふと云と因どそちの後のまこと
と因どさとしくをせの歌ともこれ竹の思ひもさう
そちのあし考候まてもふしその新を思ひいハす
ふまはた歌事もつらきを也
○てふちよ

論云こ

辨云たまてふ人志りてふ詞かどゆるれ可よれこ
格やうとのふいあがさうと辨れつ歌をわつてこ
あがめ歌をさつたれてふ志りてふと只こつたれた
歌をさつたれを皆は因よこさしこたさうてふとゆる

にこあは即はさちのけまハ辨者のつる茶てふかども
は歌ひをふりのをやふ紫をゆと云事一文の例か
然る故文化侍にさうてつべしと論者のふ古に歌詞
文詞とて二門を各きかハ通ハして文もまべしと
さつたれどふ紫をゆと云る事歌はな数ふつに
多う歌に文よハ一門もある事ちよさハいハは是かあは
に歌詞文詞れもがの何にあらはれり一文の体れ
さうてゆともまくべまハ古人の文れを何とて書候事
ちよさや古に例あらこと改まハらぬ事ありや
まもふにさへき詞をうてやし事得地と記こゆる

はとらもあはれべられ古文の例もきりよ衆と云て好ま
きれそれをハ捨てりざる例もかきゆを好まむの文
を志ひく古に老うて愚人の耳に響く心とすは
古学あはれ辭なり 歌詞とよする故論したる中に
俗語をのこ詩語とよまうりつるいまはくも雅文も
詩に於て用ひて文よ用ひぬ諸ありとてこまひあはれ
用れるふれとも事なりつごに云なり さて歌詞文詞
とて上古より衆二つにふれたるものたあはれとい
ゆやとさかき論なり ことごとくはるもさうめて後を
とても詞とよん衆コトク異なりぬ物よはるはれとて古

ふ衆歌と文となおのづから異なはれありて詞も歌
にのこみみて文のな用ひぬ詞なり 又同じ詞もさきは
の異なは事かどもゆれりたり 此は故論のためと
て別に云ふ事ありやかどいふは理をのこたて
る故廢する論なり 義のりり理を理として事ハ又
別ちれをいむきり理をたててるを、廢するきりあ
らば歌詞文詞とて別なあれきりこま理あり 然もど
も又かのつら別ちることともゆれハ事なり ことごとく
是に歌詞と云ふは古來衆よはれはるひと文よはを
さく用ゐたる例もなき詞のあらはれたるなり

必しもこれかゝる玉の詩語と云ふに於て志ひては
名目をまゝもたるとなあへばうかゞいへば
事なり又たもやの詩語と云事にかゝるとて
名目かまひ何れかゝる玉の字の例を
引て文字ちよとよふも何れ嫌ふ事と云
も心ほげかゝる玉の名目をまゝと事だふと云ふ
うらゝ玉の詩文の例を例として云ふこと成助く
と云ふはいつれ名目の假めことなればいつれ何れも害な
し詞の片うびさぬかどの事にはかゝる玉の例をまゝ
へきやうは又今の字を古と文に用ひたる事なると

かゝるとして字書を又玉の大學に引た書に秦誓
に断々今無他伎かと文にもあり又は今字を神樂歌に
於て云々於て云々も遠くも於て云々事ハ故ありて神
樂歌に引て云事あり引聲の勢を以てあへば但し
今と語をまゝとて云き下文にこれと云はうて云
ふ秋今字ハ皇玉言いかゞはもなぬくもよと云
あゝと云ふやを秋のふどのもよ又やかどの勢ひよと云
われ
○うらて

論云く

辨云は條のすべしと此趣ハことごとく一處にとんさ於事ちつ
忽れども漢文の例にあつてもことごとくあつて一はよみてハ
ふしうしうたひこと少く略きて云ふてもことごとくはうて
いたむれにすつたつて「カ」文字れいふと衆うりもは詞を
又上をは二可れと一三可れと一四可れと論中にある
なき寶三にの五とてふと云ふ交格の詞とあつてある
べく又古人れつひあつてあられる詞も是ハさうして後
ひてあつてやあつてやあつて云々云々の語のそま
らハ公羽の歌のまかむれはさるる後う序の言れ衆のそ
かとも交格の詞と一々古人れ云々云々はまの従ひと

あつては初る三體主れ論は
をよめはよは論者同の
と形やめのことつてを
どは殊よかつ詞ふるを
密言れ衆の道ふとハ
はつてはつてはつては
立論のかつてはつては
とハ中古以來の風の歌
志尔乃於保岐美をは
にあつては法の燈ハ

まの風の歌はゆえんづき詞ありとてしつ詞より集てそ
かゝるべきワサヤ

の時代の少くはぬがひ

論

辨るまの古の言後の言れどもをを云むれよ言の語
ことごとく古と後と別あるものあれば神代より今よ
りして同一詞も有り又中には古と後と大に異よりて
決て混じりも多し一はは神代後の詞とあやふ
て古れども後ありていふてハ叶とぬりやうと云る
も事れより一後をよる古言よりと云とてい

まこと多しれがことよりして中古れ詞も今の俗語を
ぞとてしつ詞をいふは事もあるハ勿論あり
さまじくあるまじれたるハはらう詞をいふことごとく非
るこゝたは古言よりいふはらうをその古言をま
たして古くゆりし詞は後をれ詞をまじへあどい
は神代も云る本に并をいふはらう如くおほを云れたる
やうにしては條をも各部大人の文を思て云れたる如く
に神代もは條は未熟の事れ文いと古混雜
は事の数にを云されたるものよりいふは各部大人の文
を思ていふはらうは但し他の條よりいふは大人の文

を思ひてうれはるるもあはれしやの故も吾翁のついで
いふもやうハ各部大人を今れ世にしく古くがの歌を
もよみ文紙も作る事を始まるともたると古今に秀
たふ大才大功うてまこと古学の祖ちういふれども
古く始れ年々始めあはれがゆゑにちうかまうつとる
多くまこと行きたる事などもゆつて之と古にま
あむごとも多たちう繁こまもちう思はるべきこと
あまは大業ハ法ぎくれば数人の多経てこそ全
動く終るべきりのちうも初う衆たぐ一人の力うと
全く動く終へきいあはれ思はるは大人を既ち衆しく

は上加めしきりあはれと思ふも古にまういふべし
あむごことまをゆゑとるあはれのちうあまづ彼大人
の文たよ癖ありまひく古を法にせよ古言の
中にも体の取遠くはあまづき紙をちう用ひ或はま
てはあまづ勢ひあはれまひこく漢文始れ流したる
詞も多く或は略くまひきを略きてかくく古言れ
まひまひあはれ又てまひを皮のちうのまひは事詞
うむごまひのまひる事又思ふのちうにつとる事
はつひもあはれまひまひのつとる目あはれたる事
を辭してまひく古にまひまひとまひあはれ

ちうと書をえは人々のあしき事どもはばはるわ
きまぐれしくもその詞の勢ははげしうてよれ
つらあつげいふも古きもの多しゆき感て謙
に古文をかくるやとあつらう人ごもれこそはば本や
しくあつむ作らうとちかぶることのせよにあま
くむろごもるや古文は定くの如くふれらいと歎
かしくむらう 抑吾うれ大人の教を受ちあつら
うらうその考はわらうとくふいとあつらう
きよむらうこそはばはる時いせう人れはるの非を志
らるむらうとくふらうとくふらうとくふらうとくふらう

のせにむらうとくふらうとくふらうとくふらう
きよむらうとくふらうとくふらうとくふらう
ひあつ師の考はわらうとくふらうとくふらう
已が罪をのりきき事事をのりききとくふらうとくふらう
たを思ひとくふらうとくふらうとくふらうとくふらう
ともはなやむらうとくふらうとくふらうとくふらう
らむらうとくふらうとくふらうとくふらうとくふらう
さああもはるれ今は倫者は是部大人の文を助
けけむらうとくふらうとくふらうとくふらうとくふらう
はむらうとくふらうとくふらうとくふらうとくふらう

バ右に翁のちれたる如くうらまはれぬをさう
きに惑はりのみして文の事いふ一しき
やう一しきまじりぬまじりぬまじりぬ
吾翁返志ひてくくくまじりぬまじりぬ
吾翁の歌文をまじりぬまじりぬまじりぬ
りて見せし志ひてぬまじりぬまじりぬ
一しき 右に此詞の事をあつたうとも古れぬ
勢をうらまはれぬ 古今れすこと勢を
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ

ふこのを教たる書なるはらぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
詞と後の詞と返まじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ
まじりぬまじりぬまじりぬまじりぬ

あれ詞のそ古れきぢた又やのほつひざ海ふとのどど
 をいまこよく藤はを老れまがゆれぬばゆきせに
 してとどめよつたど海勢とぬのそむいんぞくちよ
 めき「初学れ人古一の文を学むむとわつたど古の
 ずうと勢とぬよく考べきやうとをよはハ学との注身
 をまゝぬものちうとをッ詞をよくわりの用ひざ海
 版よく考べきやうとて全篇れさかて勢とふとな
 こも版よく得て後の事やう)

三井高蔭

鈴屋門人
 尾張社中著述目録

田中道麻呂著 撰集萬葉抄	四冊	植松有信遺稿 市岡猛彦増訂 歴代正語	三冊
同 萬葉名所歌抄	一冊	加藤磯足著 校異 首書 土佐日記	一冊
同 萬葉東語彙	一冊	市岡猛彦著 雅言假字格	二冊
同 萬葉集答問書	四冊	同 拾遺	一冊
植松有信著 尾張舊地考	一冊	同 むも鏡うし詞	一冊

市岡猛彦著
增補古言梯

二册

同
拾玉草菴集

一册

同
尾張式社考

三册

同
勢田宮緣起解

二册

同
墨北八千之化

同
美濃國喪山考 一册

磯村道彦遺稿
市岡猛彦增訂

同
春風集 二編

三册

市岡猛彦校訂
古今選類題

三册

同
古今選拾遺

文化十二年 亥 初春發行

書林

京三條通柳馬場

錢屋利兵衛

勢州松坂日野町

柏屋兵助

尾州名古屋本町拾丁目

松屋善兵衛



